

令和元年9月5日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02011

研究課題名（和文）現場に根ざした医療組織倫理の構築に向けた基礎的研究

研究課題名（英文）Basic study on organization ethics in Japanese hospital settings : A Practice-Based Approach

研究代表者

土師 俊子（服部俊子）（Haji, Toshiko）

大阪市立大学・大学院都市経営研究科・准教授

研究者番号：50609112

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,800,000円

研究成果の概要（和文）：倫理的な医療組織はいかに創成できるのかという問題意識から、病院の倫理委員会体制を医療組織倫理として見直すことを目的に、実践的研究として実際の倫理委員会活動の調査を、理論的研究として医療組織倫理やビジネス倫理の文献サーベイを行なった。その結果、病院内理倫理委員会は、組織という専門分化された官僚制において、委員会メンバーに完結するような閉じたシステムではなく他の部門やスタッフに開いたものとして、委員会内外の「自己言及」としての活動と、専門分化された現場で「対話」の場を作ることが必要であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

病院内倫理委員会は、診療上に生じる倫理的問題に対応するために設置されているが、そこで想定されている倫理的問題は患者－医療者間に生じる問題を対象にした院内倫理委員会制度となっている。しかし、実際には倫理的問題に組織の問題が内在しており、倫理的な研究はこれまで、そのこと、すなわち「組織の次元」というマクロでもメゾでもない次元を見落としてきた。本研究は、哲学倫理学で考察しづらい病院の「組織」と倫理を検討し直すことに学術的意義があり、病院で生じる倫理的問題の予防・解決システムを検討することに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In order to recognize Japanese hospital ethics committee (HEC) system in hospital settings, we investigated the ethics committee activities and searched “organization ethics in healthcare” “and “business ethics in healthcare” in the literature, from the problematic issues how we explore ethical organization culture. In the results, we suggest that it is important thing that hospital ethics committee was not closed system composed of only committee member within the professional bureaucracy, but open system in hospital setting and it is necessary to act as “self-reference” in and outside the committee and to create the place of dialogue.

研究分野：哲学、倫理学、生命倫理、ビジネス倫理

キーワード：病院内倫理委員会 医療組織 臨床倫理 院内倫理制度

1. 研究開始当初の背景

日本の病院における臨床倫理の委員会制度は、外部監査の受審や専門職能団体のガイドラインで推奨されたことが契機となり設けられることが多い。委員会制度が推奨される一方で、倫理委員会に求められる三つの役割 倫理事案の相談・審議・助言・提言、院内指針の策定および評価、委員会内での自己教育を含む院内教育 が実質的に機能していない問題が指摘され始めていた。(以前の科研課題で)実質的に機能しづらい現状を調査すると、組織の問題が倫理的問題を生じさせている現状があった。調査結果として、臨床現場に多く生じている倫理的問題には組織の問題が多く含まれているが、倫理委員会制度がそもそも「組織」というメゾ次元を見落としているために組織の問題に対応できないことが示唆された。

2. 研究の目的

倫理的な医療組織はいかに創成できるのかという問題意識から、実際に倫理的問題を解決・予防するために医療機関において機能している病院内倫理委員会を軸にした倫理サポートシステムを、組織という観点から見直すことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 医療現場の倫理サポートシステムの実態を調査する、(2) 「医療組織」「医療組織倫理」を「組織研究」の知見を参考に倫理的に考察する、(3) 実態調査結果の分析ならびに「医療組織倫理」の理論的考察を学際的に行うことで、医療組織倫理の展望や課題を検討する、(4) 現行の倫理サポートシステムを根本的に問い直し、医療現場における倫理的な医療実践を後押しするような対話に開かれたダイナミクスな倫理サポートシステムの検討、の4点を課題とした。

4. 研究成果

(1) 臨床倫理委員会の実態調査として、1つの病院の委員会活動に約1年間半研究者として参加し、音声を記録した。音声記録を逐語録にし、その結果を分析した(調査結果・分析は(3)に記載)。分担研究者であるクリニカルエシシスト(臨床倫理士)の活動調査として、活動する病院でプレ調査を行なった。病院での倫理活動を2日間参与観察し、また、クリニカルエシシストとして公式活動(勤務)している初の公式「立場」として、活動してきた経緯の報告発表会を行なった。

(2) organization ethics in healthcare が登場した経緯を文献から整理した結果、米国の20世紀後半の医療制度改革により医療現場や市民から不満の声があがり、医療訴訟も増えたことが、主な要因になっていることが示唆された。ただし、文献の多くは、実際の管理者による実践的研究であり、organization ethics in healthcare の理論的研究が検索されてこなかった。また、そもそもの文献数も多くなく、organization ethics で検索した。その結果、organization ethics は、営利企業を主な研究対象としてきたビジネスエシックスで、組織の道徳的責任、集団意思決定プロセスとして議論されていることがわかった。医療組織の倫理を考察するための論点析出には、さらなる文献サーベイが必要であることがわかった。また organization という近代に登場した概念は、日本でも組織文化が頻繁に言われるように「文化」という規範が生成し続ける場所でもある。米国の民間保険医療制度がベースのヘルスケア組織が検討されている organization ethics / in healthcare 文献を参考にしつつ、「日本」との差異を検討するための文献サーベイも、さらなる課題であることがわかった。

(3) 臨床倫理委員会の実態調査を行い、その委員会活動の実態を考察したところ、委員会メンバーと委員会が自己完結することなく、病院にある他の委員会や他の職員に緩やかに働きかける活動をしていた。調査した委員会は、病院内の職員教育としての倫理教育を、集合研修だけではなく他の委員会と共同で実施することもあった。職員の「倫理」教育は一般的に集合研修という形をとるが、その形式の規範的教育より「対話文化の醸成」、例えばスタッフが日常的に集まる機会を対話的な場とする取り組みが有用であるかもしれないことが示唆された。また、コンサルテーション活動の調査結果は、コンサルテーション問題を相談する以前の組織レベルの<コミュニケーション>の問題が病院に多いことを明らかにした。多くの病院で採用するコンサルテーション制度は、医療スタッフが倫理的問題を委員会に相談し、委員会が相談を受け検討した助言を医療スタッフに回答として提示する、という流れになっているが、それでは病院で多く発生する倫理的問題を特定する以前の問題に対応困難であることが示唆された。

文献サーベイから見えた結果を参考に、調査した委員会活動の特徴を考察した結果、ミクロ・メゾレベルにおける「自己言及」としての活動という姿が見えてきた。以上から、倫理委員会が、組織という次元を見落とさないものとして機能するためには、「対話」「自

己言及」としての活動が重要になることが示された。日本の病院における倫理サポートシステムを検討するには、organization ethics in healthcare をめぐる他の学問分野の研究成果調査、米国の医療保健制度、専門職制度等の文献調査、また、「組織」や「臨床」概念の倫理的考察が、今後の課題であることがわかった。(なお、クリニカルエシシストの実態調査はさらなる調査が必要なため今後も継続する)

(4) 医療現場における倫理的な医療実践を後押しするような対話に開かれたダイナミクスな倫理サポートシステムには、組織という専門分化された官僚制において、委員会メンバーに完結するような閉じたシステムとしての院内倫理教育やコンサルテーション活動ではなく、他の部門やスタッフに開いたものとして、委員会内外に向けた「自己言及」的な活動と、専門分化された現場では困難だが「対話」の場を作るための活動が鍵となる可能性を開くことができた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 13 件)

- 堀江剛、哲学する装置:ソクラティック・ダイアローグ、環境会議(秋)、査読無、178-183、2018年
- Okita T, Ohashi N, Kabata D, Shintani A, Kato K, Public attitudes in Japan toward participation in whole genome sequencing studies, Human genomics, 査読有, 12(1)21, 2018年
- 金城隆展、倫理カンファの実践とナラティブエシックス、モダンフィジシャン、査読無、38(1)、79-84、2018年
- 川村尚也日本の医療組織・経営の特性と地域医療連携の課題としての経営倫理、日本情報経営学会第75回全国大会予稿集(秋号)、査読有、49-52、2018年
- 川村尚也、現代日本の病院組織の特徴と経営課題 組織論とイノベーション経営の視点から、病院、査読無、Vol.7、20-24、2017年
- Takaya Kawamura, Enabling sustainable development in health care through art-based mediation, Journal of Cleaner Production、査読有、1914-1925、2017年
- 服部俊子、樫本直樹、病院組織と倫理-組織の倫理化に関する一考察-、九州医学哲学・倫理学会誌「人間と医療」、査読有、32-40、2016年
- 堀江剛、倫理と組織:社会システム理論から見た倫理の可能性、待兼山論叢 哲学編、査読無、1-27、2016年
- 大北全俊、横田恵子、「うっかりの倫理」試論-リスクをめぐる主体と責任に関する考察、査読有、21-42、2016年
- Okita T, Enzo A, Asai A. Reexamination of the concept of 'Health promotion' through a critique of the Japanese health promotion policy. Public Health Ethics, 査読有, 2016年, DOI: <https://doi.org/10.1093/phe/phw043>
- 川村尚也、科学技術組織における経営倫理の研究アプローチ 米国企業・経営倫理研究とクリティカルマネジメント研究の視点から 科学史研究、査読無、Vol.55、172-177、2016年
- 金城隆展、ナラティブエシックスとは何か:その理論と実践の体系的検討、査読無、臨床倫理、39-46、2016年
- 土屋貴志、ヘルシンキ宣言の成立、15年戦争と日本の医学医療研究会会誌、査読有、第16巻第1号、22-39、2016年

[学会発表](計 28 件)

- 服部俊子、大北全俊、樫本直樹、堀江剛、「医療の組織倫理」という視点、第10回応用哲学会、2018年
- 堀江剛、哲学する装置:ソクラティック・ダイアローグ、第1回日本哲学プラクティス学会、2018年
- Okita T, Enzo A, Tanaka M, Kadooka Y, Asai A, Ethical consideration on the decision process of HPV vaccine policy in Japan, 第8回日仏国際生命倫理会議 VIII French-Japanese International Bioethics Conference, Ehime University, Matsuyama City, 2018年
- Sue Moffat, Takaya Kawamura, Helping practitioners create meaningful knowledge through arts-mediated management learning: A dual-action-research approach to the innovation management in health/social care, The 1st Japanese Standing Conference on Organizational Symbolism, 2018年
- Takaya Kawamura, Learning health/social care management critically through "Cultural Animation" community intervention and empowerment workshops, The 9th Art

of Management and Organization Conference、2018年
Yosuke Ohashi・Takaya Kawamura, Learning health/social care management critically through theatrical acting workshops、The 9th Art of Management and Organization Conference、2018年

Takaya Kawamura, Tatiana Chemi, Anne Pässilä, Allan Owens、Performing performance, embodying bodies, and bridging bridges、The 9th Art of Management and Organization Conference、2018年8月31日

Takaya Kawamura, Helping practitioners create meaningful knowledge through arts-mediated management learning: A dual-action-research approach to the innovation management in health/social care、The 1st Japanese Standing Conference on Organizational Symbolism、2018年8月17日

川村尚也、日本の医療組織・経営の特性と地域医療連携の課題としての経営倫理日本情報経営学会第75回全国大会特定自由論題セッション「社会基盤としての地域医療連携情報システムの可能性と課題」、2017年

服部俊子、病院「組織の問題」という問題 保健医療組織倫理の議論から、日本医学哲学・倫理学会第36回大会、2017年

Takaya Kawamura, Anne Passilla, Sue Moffat、Connecting creativity and sustainability via human body: Re-creating creative and sustainable organizational bodies through body-based management learning、The 2nd ARTEM Organizational Creativity and Sustainability International Conference Sub-theme 3、2017年

Takaya Kawamura, Double stimulation in the arts-mediated critical management learning for health/social care organizations、The 33rd European Group for Organization Studies Colloquium Sub-theme 64: Activity Theory and Organizations(国際学会)、2017年

金城隆展、倫理学のバックグラウンドを有する倫理コンサルタントの役割とその専門性の再考、日本生命倫理学会第29回年次大会 大会企画シンポジウムII 発、2017年

Takaya Kawamura、Facilitating double stimulation in the arts-mediated critical management learning for health/social care workers、10th International Conference on Researching Work & Learning、2017年

服部俊子、金城隆展、櫻本直樹、堀江剛、大北全俊、臨床倫理の委員会活動に現れる病院「組織」の問題、日本生命倫理学会、2016年12月03日

金城隆展、琉球大学医学部附属病院における組織倫理の現状と課題、日本生命倫理学会、2016年12月03日

服部俊子、川村尚也、大北全俊、金城隆展、尾藤誠司、濱井和子、高橋正泰、倫理的にマインドフルな病院づくり 病院倫理制度の創造的破壊に向けた倫理学と経営学からの問題提起 2つの倫理委員会制度と「組織」の倫理(学)、日本医療・病院管理学会、2016年09月18日

川村尚也、自組織アクション・リサーチ等を用いた「協働・連携」イノベーション経営人材の育成、日本医療・病院管理学会(招待講演)、2016年09月17日

Takaya Kawamura、Experimenting arts-mediated critical management learning for health/social care organizations - an analysis from a Vygotskian perspective of double stimulation、The 32nd European Group for Organization Studies Colloquium、Colloquium、2016年07月08日

Takaya Kawamura、Evaluating the effects of arts-mediated workshops on the critical management learning for health/social care professionals and managers in Japan、The Annual Conference of the European Academy of Management、2016年06月04日

⑳ 堀江剛、服部俊子、組織における「対話」の位置づけ、「第2回哲学的対話実践の社会的接続の可能性」研究会、2016年06月

㉑ 土屋貴志、ヘルシンキ宣言の成立、15年戦争と日本の医学医療研究会第38回定例研究会一般演題(於東京大学医学部)、2015年11月22日

㉒ 金城隆展、カード方式臨床倫理事例検討法とナラティブの能力、日本哲学医学・倫理学会大会、2015年11月07日

㉓ 金城隆展、医療倫理教育に於けるカード方式の事例検討方法の紹介:ジョンセンらの4分割法を超えて、琉球大学附属病院における臨床倫理コンサルテーション~2013年スタートから2年後の現状と課題、日本哲学医学・倫理学会、第6回医哲Café、2015年11月06日

㉔ 川村尚也・黒木淳、地域包括ケアシステムに貢献する経営責任組織の持続可能性に関する経営学的・会計学的研究 - 地域に立脚したモデル構築を目指して -、医療経済学会第1回研究大会、京都大学(京都市)、2015年9月6日

㉕ Anita Mangan, Takaya Kawamura, Steve French, Shin Shimada、Finding co-operative alternatives? A comparison of UK and Japanese community co-operatives、The 9th International Conference in Critical Management Studies Sub-theme 24: Co-operative

and community owned enterprises: resisting or reproducing the neoliberal consensus?, University of Leicester, Leicester, UK, July 7-10, 2015

- ⑳ Takaya Kawamura, Facilitating expansive learning and developmental work research at health/social care organizations through arts-mediated critical management learning, The 31st European Group for Organization Studies Colloquium Sub-theme 17: Activity Theory and Organizations, ALBA Graduate Business School, The American College of Greece, Athens, Greece, July 2-4, 2015
- ㉑ 川村尚也・黒木淳、地域包括ケアシステムに貢献する経営責任組織の持続可能性に関する経営学的・会計学的研究- 地域に立脚したモデル構築を目指して-医療経済学会第10回研究会、2015年09月06日

〔図書〕(計 4件)

服部俊子、大北全俊、櫻本直樹、他(霜田求編)、テキストブック生命倫理、法律文化社、2018年、25-37、74-84、185-197
大北全俊、他(大北全俊、他編)、倫理的に考える:医療の論点、日本看護協会出版会、2018年、215
土屋貴志、医学研究・臨床試験の倫理 わが国の事例に学ぶ、日本評論社、2018年、90-106、
服部俊子、大北全俊、櫻本直樹、(大北全俊、他編)、他、少子超高齢社会の「幸福」と「正義」日本看護協会出版会、2016年

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 大北 全俊

ローマ字氏名:(OKITA, Taketoshi)

所属研究機関名: 東北大学

部局名: 大学院医学系研究科

職名: 講師

研究者番号(8桁): 70437325

研究分担者氏名: 櫻本 直樹

ローマ字氏名:(KASHIMOTO, Naoki)

所属研究機関名: 産業医科大学

部局名: 医学部

職名：助教
研究者番号（8桁）：20622533

研究分担者氏名：川村 尚也
ローマ字氏名：(KAWAMURA, Takaya)
所属研究機関名：大阪市立大学
部局名：大学院都営経営研究科
職名：准教授
研究者番号（8桁）：80268515

研究分担者氏名：金城 隆展
ローマ字氏名：(KINJO, Takanobu)
所属研究機関名：琉球大学
部局名：医学部附属病院
職名：特命教職員
研究者番号（8桁）：10600174

研究分担者氏名：土屋 貴志
ローマ字氏名：(TSUCHIYA, Takashi)
所属研究機関名：大阪市立大学
部局名：大学院文学研究科
職名：准教授
研究者番号（8桁）：90264788

研究分担者氏名：堀江 剛
ローマ字氏名：(HORIE, Tsuyoshi)
所属研究機関名：大阪大学
部局名：大学院文学研究科
職名：教授
研究者番号（8桁）：50379898

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。